

大にぎわいの秘湯にて

中野明

なかの あきら/1962年滋賀県生まれ。ノンフィクション作家。関西学院大学非常勤講師。『腕木通信—ナポレオンが見たインターネットの夜明け』(朝日新聞社)『サムライ、ITに遭う』(NTT出版)『書くためのパソコン』『バンド社会がやってくる!』(PHP研究所)、『ドラッカーが描く未来社会』(秀和システム)など著書多数。

群馬県の猿ヶ京温泉から、徒歩で三国街道の起伏を上り下り、北西にある温泉に向かった。この春のことである。同温泉は、いわゆる「秘湯」とよばれていて、その一軒宿は「日本秘湯を守る会」の会員にもなっているという。

三時間ほど歩いただろうか。ようやくその旅館に到着する。しかし、わたしの秘湯のイメージと、どこかズレがある。広々とした駐車場には、自動車の数が妙に多く、そこから家族連れ、高齢者、カップルが三々五々、宿の建物を目指して歩いていく。

もっとも、わたしは、秘湯めぐりが目的ではない。いま、江戸幕末の入浴事情について調べていて、その関係で、明治六年に営業を始めた同館に、興味をもったのだ。気をとり直して部屋に入る。

しかし、主目的の期待も、入浴前から裏切られた。係の人によると、とおされた二階部屋の本館は明治六年築ながら、主浴場は鹿鳴館様式をとり入れた明治二八年築のものだという。風呂に向かうと、確かに、脱衣場、洗い場、浴槽がひと続きになっていて、古い浴場のなごりは見られた。しかし、すでに二〇名ほどの先客でにぎわっている浴場から、幕末の残り香を感じとるのは、ちと困難な作業に思えた。

結局、これといった収穫もないまま、夕食前の小一時間、縁側の椅子に腰掛け、一人ビールを飲む。だんだん薄暗くなるにしたがって、川をはさんだ向かいの別館に、灯りが次々ともる。わたしは、夕食を運んできた仲居さんに尋ねてみた。

「すいぶん、にぎわっているようですね」
「はい。本日は満室でございます」
「明日は月曜日なのに、すごいなあ」

「ええ、このころは、秘湯ブームですから。先ごろも、当館にテレビ番組の取材がありました。そのお陰もあって、土日、祝日は、だいたい満室です」
なるほど、秘湯ブーム、それにテレビ番組か。どおりで大盛況なわけだ。しかし、秘湯のはずが、人ばかりとは、なんとも皮肉な話である。

そもそも、本当に秘湯を守ろうと思えば、旅館の経営は自ずと厳しくなる。逆に、経営を優先させれば、人でのぎわいはするのだろうが、それはもはや秘湯ではない。このジレンマは、秘湯を守ることの難しさを物語っているように思う。

翌日、事務的な、フロントのおじさんの対応に、こちらも事務的に支払いを済ませる。そして、そそくさとバスに乗り込み、平成の秘湯をあとにした。

月刊



目次

AUGUST 2007 8
月刊みんぱく

01 エッセイ 世界へ世界から
大にぎわいの秘湯にて
中野明

02 特集 **ぐれる**

「ぐれる」といわない時代、
いえない時代

吉田 憲司

祭りと若者

笹原 亮二

ブラジルのスラムの若者たち

北森 絵里

国家権力が見下ろす街で

小林 実

「ぐれ」雑感

山本 真鳥

08 モノ・グラフ
選ばれた写真

木田 歩

10 地球ミュージアム紀行
遺跡という名のミュージアム

川口 幸也

11 表紙モノ語り
金魚ねぶた

丹野 正

12 みんなくインフォメーション

14 万国津々浦々
電子的な消費生活

金子 正徳

15 時論・新論・理想論
ゴミから革命

平井 京之介

16 外国人として生きる
ドミニカ人選手たちの兄貴分

窪田 暁

18 地球を集める
カレンダーから世界を読み解く

中牧 弘允

20 生きもの博物誌
カヤツリグサでゴザ作り

小坂 康之

22 フィールドで考える
月に願いを

小松 久恵

24 開館30周年記念事業のご案内

次号予告・編集後記

